

上級編

子供たちに
声に出して読んで、
覚えてほしい・書いてほしい
作品集

広島県教育委員会



《上級編 目次》

貝殻・・・・・・・・・・・・・・・・	新美南吉	1	檸檬・・・・・・・・・・・・・・・・	梶井基次郎	23
落葉松・・・・・・・・・・・・・・・・	北原白秋	2	オツベルと象・・・・・・・・	宮沢賢治	24
在る日の詩・・・・・・・・・・	山村暮鳥	3	山月記・・・・・・・・・・	中島敦	25
レモン哀歌・・・・・・・・・・	高村光太郎	4	李陵・・・・・・・・・・	中島敦	26
消えゆく虫・・・・・・・・・・	室生犀星	5	斜陽・・・・・・・・・・	太宰治	27
初めて「カラマゾフ兄弟」			富岳百景・・・・・・・・・・	太宰治	28
を讀んだ晩のこと・・	室生犀星	6	土佐日記(門出)・・	紀貫之	29
汚れつちまつた悲しみに……			枕草子(五月の山里)	清少納言	30
	中原中也	7	枕草子(香炉峰の雪)	清少納言	31
林と思想・・・・・・・・・・	宮沢賢治	8	源氏物語(若紫)・・	紫式部	32
笛・・・・・・・・・・	峠三吉	9	方丈記・・・・・・・・・・	鴨長明	33
学問のすゝめ・・・・・・・・	福沢諭吉	10	徒然草(神無月のころ)	兼好法師	34
五重塔・・・・・・・・・・	幸田露伴	11	徒然草(猫また)・・	兼好法師	35
舞姫・・・・・・・・・・	森鷗外	12	東海道中膝栗毛・・	十返舎一九	36
木精・・・・・・・・・・	森鷗外	13	短歌・・・・・・・・・・	中村憲吉	37
草枕・・・・・・・・・・	夏目漱石	14	静夜思・・・・・・・・・・	李白	38
こころ・・・・・・・・・・	夏目漱石	15	元二の安西に使ひするを送る		
夜明け前・・・・・・・・・・	島崎藤村	16		王維	39
羅生門・・・・・・・・・・	芥川龍之介	17	不識庵機山を撃つ凶に題す		
少年―海・・・・・・・・・・	芥川龍之介	18		頼山陽	40
出家とその弟子・・	倉田百三	19	頼山陽が十四歳の時に作った詩		
千鳥・・・・・・・・・・	鈴木三重吉	20		頼山陽	41
一房の葡萄・・・・・・・・	有島武郎	21	冬夜讀書・・・・・・・・	菅茶山	42
小さき者へ・・・・・・・・	有島武郎	22	百人一首・・・・・・・・		43

貝殻かいがら

新美南吉

かなしきときは

貝殻かいがら鳴らそ。

二つ合わせて息吹いぶきをこめて。

静かに鳴らそ、

貝がらを。

誰もその音ねを

きかずとも、

風にかなしく消ゆるとも、

せめてじぶんを

あたためん。

静かに鳴らそ

貝殻かいがらを。

落葉松 か
ら
まつ

北原白秋

一

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

四

からまつの林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

二

からまつの林を出でて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、
また細く道はつづけり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆるしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、
からまつとささやきにけり。

三

からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

六

からまつの林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

或る日の詩

山村暮鳥

ひとりさびは寂しい

群衆の中はさらにさび寂しい

自分ばかりか

否いな

おさびお寂しい人間よ

かくもいのち生はさびしいものか

此この真実に生きよと

木の葉はちる

はらはらとちる

秋の黄昏たそがれ

みよ、いま世界は黄金色に夕焼けして

此この一日を終わるところだ

はらはらとちる木の葉っぱ

レモン哀歌^{あいか}

高村光太郎

そんなにもあなたはレモンを待つて^っみた
かなしく白くあかるい死の床^{とこ}で
わたしの手からとつた^っ一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりと噛^かんだ
トパアズいろの香気^{こうき}が立つ
その数滴^{すうてき}の天のものなるレモンの汁^{じゅう}は
ぱつとあなたの意識を正常にした
あなたの青く澄^すんだ眼がかすかに笑^うふ
わたしの手を握^{にぎ}るあなたの力の健康さよ
あなたの咽喉^{のど}に嵐^{あらし}はあるが
かういふ命^{いのち}の瀬戸^{せと}ぎはに
智恵子^{ちえこ}はもとの智恵子^{ちえこ}となり
生涯^{しょうがい}の愛^{あい}を一瞬^{いっしゆん}にかたむけた
それからひと時
昔山巔^{さんてん}でしたやうな深呼吸^よを一つして
あなたの機関^{きかん}はそれなり止まつた^っ
写真^{しやうしん}の前に挿^さした桜の花^{はな}かげに
すずしく光るレモンを今日^{けふ}も置^おかう

消えゆく虫

室生犀星

茎くきの青きに消えぬべく

しづかに這はへる虫のあり。

さりゆく秋のおちかたに

ありとしもなきかげ曳ひきて

あはれに消ゆる虫のあり。

ゆるるがままの日ぐれどき

茎は冷えたち

水のほとりにかたむけり。

ただなきもえぬ羽はねふりて

あはれに消ゆる虫のあり。

初めて「カラマヅフ兄弟」
を読んだ晩のこと

室生犀星

私はふと心をすまして

その晩も椎の実が屋根の上に

時を置いて撥かれる音をきいた

まるで礫を遠くから打ったやうに

侘しく雨戸をも叩くことがあつた

郊外の夜は靄が深く

しめりを帯びた庭の土の上に

かなり重い静かな音を立てて

椎の実しひは

ぼつりぼつりと落ちてきた

それは誰でも彼の実のおちる音を

かつて聞いたものがお互ひに感じるやうに

まるで人間の微かな足音のやうに

温かい静かなしかも内気な歩みで

あたりに忍んで来るもののやうであつた

私は書物を閉ぢて

雨戸を繰つて庭の靄を眺めた

温かい晩の靄は一つの生きもののやうに

その濡れた地と梢とにかかつてゐた

自分は彼の愛すべき孤独な小さな音響が

実に自然に、寂然として

目の前に落ちるのをきいてゐた

都会のはづれにある町の

しかも奥深い百姓家の離れの一室に

私は父を亡つて

遠く郷里から帰つて坐つてゐた

あたかも自らがその生涯の央に立つて

しかも「苦しんだ芸術」に

あとの生涯をゆだねつくさうと心に決めた

深い晩のことであつた

※「カラマヅフの兄弟」

ドストエフスキー 作

汚れ^{よご}っちまった悲しみに……

中原中也

汚れ^{よご}っちまった悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れ^{よご}っちまった悲しみに

今日も風さえ吹きすぎる

汚れ^{よご}っちまった悲しみは

たとえば狐^{きつね}の革裘^{かわころも}

汚れ^{よご}っちまった悲しみは

小雪のかかってちぢこまる

汚れ^{よご}っちまった悲しみは

なにのぞむなくねがうなく

汚れ^{よご}っちまった悲しみは

倦怠^{けだい}のうちに死^{ゆめ}を夢む

汚れ^{よご}っちまった悲しみに

いたいたしくも怖^{おじ}気^けづき

汚れ^{よご}っちまった悲しみに

なすところもなく日は暮れる……

林と思想

宮沢賢治

そらねごらん

むかふに霧にぬれてゐる

葦のかたちのちひさな林があるだらう

あすこのところへ

わたしのかんがへが

ずるぶんはやく流れて行つて

みんな

溶け込んでゐるのだよ

こゝいらはふきの花でいつぱいだ

笛

峠三吉

静かなる笛の音は 𪗇して

松ヶ枝まつがえの月も青し

命いのちの泉いづみ掬くみて 吹ふく人の心ぞ哀あわれ

遠とほき野のに 影かげ 翔かりけむ

遠山とほやまに 光ひかりり濡ぬれけむ

耳こ凝こらす ありなしものの

背せに迫せまりては

月つきの冴さえ 笛ふえに入りては

𪗇呼こたぶ 笛ふえの音ねは 更ふけまさり

松ヶ枝まつがえに 寄よする雲くももなく

極きはまりゆく 命いのちちの音ね 哀あわれ

学問のすゝめ

福澤 諭吉

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず
と言えり。されば天より人を生ずるには、万人は
万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別
なく、万物の靈たる身と心との働きをもつて天地
の間にあるよろずの物を資り、もつて衣食住の用
を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして
各と安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。さ
れども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこき
人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富め
るもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様
雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや。その次第
甚だ明らかなり。実語教に、人学ばざれば智なし、
智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人と
の別は、学ぶと学ばざるとに由つて出来るものな
り。

五重塔

幸田露伴

材を斫る斧の音、板削る鉋の音、孔を鑿るやら釘打つ
やら丁々かちかち響忙しく、木片は飛んで疾風に木の葉
の翻へるが如く、鋸屑舞つて晴天に雪の降る感応寺境内
普請場の景況賑やかに、紺の腹掛頸筋に喰ひ込むやうな
を懸けて小胯の切り上がった股引いなせに、つつかけ草
履の勇み姿、さも伶俐氣に働くもあり、汚れ手拭肩にし
て日当りの好き場所に蹲踞み、悠悠然と鑿を研ぐ衣服の
垢穢き爺もあり、道具捜しにまごつく小童、頻りに木を
挽割日傭取り、人さまさまの骨折り氣遣ひ、汗かき息張
るその中に、総棟梁ののつそり十兵衛、皆の仕事を
監督りかたがた、墨壺墨さし矩尺もつて胸三寸にある
切組を実物にする指図命令。

舞姫まいひめ

森鷗外

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓たくのほとりはいと静かにて、熾熱灯しねつとうの光の晴れがましきも徒いたづらなり。今宵こよいは夜ごとにここに集つどひ来る骨牌仲間かるたもホテルに宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。五年前いっごせのことなりしが、平生ひしろうの望み足りて、洋行の官命こをかうむり、このセイゴンの港まで来しころは、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載のせられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、幼き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常よのつねの動植金石、さては風俗ふうぞくなどをさへ珍めづしげに記ししを、心ある人はいかにか見けん。こたびは途みちに上りし時、日記にきものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、独逸ドイツにて物学びせし間に、一種のニル・アドミラリの気象をや養ひ得たりけん、あらず、これには別に故あり。

木精こだま

森鷗外

岩が屏風びょうぶのように立っている。登山をする人が、初めてミヤマウスユキソウの白い花を見つけて喜ぶのは、この谷間である。フランツはいつもここへ来てハルローと呼ぶ。

麻のようなブロンドな頭を振り立って、どうかしたらローマ法皇の宮廷へでも生け捕とられていきそうな高音でハルローと呼ぶのである。

呼んでしまっただけじいっとして待っている。

しばらくすると、大きい鈍いコントルバスのような声でハルローと答える。

これが木精こだまである。

フランツはなんにも知らない。ただ暖かい野の朝、ヒバリが飛び立って鳴くように、冷たい草むらの夕べ、オロギが忍しのびやかに鳴くように、ここへ来てハルローと呼ぶのである。しかし木精こだまの答えてくれるのがうれしい。木精こだまに答えてもらうために呼ぶのではない。呼べば答えるのが当たり前である。日の明るく照ついているところに立っていれば、影が地に落ちる。地に影を落とすために立っているのではない。立っていれば影が差すのが当たり前である。そしてその当たり前のことがうれしいのである。

草枕くさまへら

夏目漱石

山路やまみちを登りながら、こう考えた。

知に働けば角かどが立つ。情じょうに棹さおさせば流される。意地を通せば窮屈きゆうくつだ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高こうじると、安い所へ引き越こしたくなる。どこへ越しても住みにくいと悟さとった時、詩が生まれて、画えができる。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣さんげんりょうどなりにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越こす国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

越こすことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、くつろげて、束つかの間の命を、束つかの間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職ができて、ここに画家という使命くだが降る。あらゆる芸術の士は人の世をのどかにし、人の心を豊かにするがゆえに尊たつとい。

上 先生と私

一

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。余所々しい頭文字杯はとても使ふ氣にならない。

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からは是非来いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛る事にした。私は金の工面に二三日を費やした。

所が私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にゐる親達に勧めない結婚を強ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに当然帰るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしやうと相談をした。私には何うして可いかわからなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より帰るべき筈であつた。それで彼はとうく帰る事になつた。折角来た私は一人取り残された。

夜明け前

島崎藤村

木曾路はすべて山の中である。あるところは

岨そばづたいに行く崖の道であり、あるところは数

十間の深さに臨む木曾川きそがわの岸であり、あるところ

ろは山の尾おをめぐる谷の入口である。一筋の街

道はこの深い森林地帯を貫つらぬいていた。

東ざかいの桜沢さくらざわから、西の十曲峠じゅうきょくとうまで、木曾

十一宿しゆくはこの街道かいどうに添そうて、二十二里余にじゅうにりよに互あひる

長い谿谷けいこくの間に散在していた。道路の位置も

幾度いくたびか改まったもので、古道はいつの間にか深

い山間に埋うずもれた。

羅生門

芥川龍之介

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剥げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

なぜかというところ、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。

少年——海

芥川龍之介

保吉の海を知ったのは、五歳か六歳の頃である。もつとも海とはいふものの、万里の大洋を知ったのではない。ただ大森の海岸に狭苦しい東京湾を知ったのである。しかし狭苦しい東京湾も当時の保吉には驚異だった。奈良朝の歌人は海に寄せる恋を「大船の香取の海にいかり下ろしいかなる人かもの思はざらん」と歌った。保吉はもちろん恋も知らず、万葉集の歌などというものはなおさら一つも知らなかった。が、日の光に煙った海のなにか妙にももの悲しい神秘を感じさせたのは、事実である。彼は海へ張り出した葭簾張りの茶屋の手すりにいつまでも海を眺め続けた。海は白々と輝いた帆掛け船を何そうも浮かべている。長い煙を空へ引いた二本マストの汽船も浮かべている。翼の長い一群のカモメは、ちやうど猫のように鳴き交わしながら、海面を斜めに飛んで行った。あの船やカモメはどこから来、どこへ行ってしまふのであろう？ 海はただ幾重かの海苔粗朶の向こうに青々と煙っているばかりである。……

出家とその弟子

(略)

倉田百三

唯円 お師匠様、あの(顔を赤くする)恋とはどのやうなものでございませうか。

親鸞 (まじめに) 苦しいものだよ。

唯円 恋は罪の一つで御座いませうか。

親鸞 罪に絡まつたものだ。此の世では罪をつくらずに恋をすることは出来ないのだ。

唯円 では恋をしてはいけませんね。

親鸞 いけなくても誰も一生に一度は恋をするものだ。人間の一生の旅の途中にある閑所のやうなものだよ。その閑所を越えると新しい光景が眼の前に展けるのだ。此の閑所の越え方の如何で多くの人の生涯はきまると云つてもいい位だ。

唯円 そのやうに重大なものですか。

親鸞 二つとない大切な生活材料だ。真面目に此の閑所にぶつかれば人間は運命を知る。愛を知る。すべての知恵の芽が一時に目醒める。魂はものの深い本質を見る事が出来るやうになる。いたづらな、浮いた心で此の閑所に向へば、人は盲目になり、ぐうたらになる。その閑所の向ふの涼しい国をあくがれる力がなくなつて、閑所の此方で精力がつきてへとへとになつてしまふのだ。

唯円 では恋と信心は一致するもので御座いませうか。

親鸞 恋は信心に入る通路だよ。人間の純な一すぢな願ひをつき詰めて行けば、皆宗教的意識には入り込むのだ。恋するとき人間の心は不思議に純になるのだ。人生のかなしみが解るのだ。地上の運命に触れるのだ。そこから信心は近いのだ。

唯円 では私は恋をしてもよろしいのですか。

親鸞 (ほほむ) お前の問ひ方は愛らしいな。私はよいとも悪いとも云はない。恋をすればするでよい。ただまじめに一すぢにやれ。

唯円 あなたも恋をなさいましたか。

千鳥

鈴木三重吉

千鳥の話は馬喰ばくろウの娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ蓆むしろを敷いてしよんぼりと坐っている。干し列べた平ぐき茎には、もはや糸筋ほどの日影もささぬ。洋服で丘を上あつてきたのは自分である。お長は例の泣きだしそうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、そして襷たすきがけの真似まねは初やがこと。その三人ともみんな留守だと手を振る。頤あじで奥を指ゆびさして手枕をするのは何のことか解らない。藁わらでたばねた髪かみの解ほれは、かき上げてもすぐまた顔に垂れ下る。

座敷へ上つても、誰も出てくるものがないから勢はずみがない。廊下へ出て、のこのこ離れの方へ行つてみる。麓ふもとの家で方々に白木綿を織るのが轡虫くわむしが鳴くように聞える。廊下には草花の床とこが女帯ほどの幅で長く続いている。二三種の花が咲いている。水仙の一と株に花床が尽きて、低い階段を拾うと、そこが六畳の中二階である。自分が記念に置いて往つた摺すり絵が、そのままに灰暗ほのぐらく壁に懸かっている。これが目につくと、久しぶりで自分の家うちに帰つてきでもしたように懐なつかしくなる。床の上に、小さな花瓶に竜胆りんとウの花が四五本挿してある。夏二た月の逗留どとうりゅうの間、自分はこの花瓶に入り替りしおらしい花を絶やしたことがなかった。床の横の押入から、赤い縮緬ちりめんの帯上げのよなものが少しばかり食はみだしている。ちよつと引つ張つてみるとすうと出る。どこまで出るかと続けて引つ張るとすらすらとすつかり出る。

一房の葡萄

(略)

有島武郎

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開けて下さいました。二人は部屋の中にはいりました。

「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰わなくてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこしながら僕達を向かい合わせました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはぶら下げている僕の手をいそいそと引つ張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんていってこの嬉しさを表せばいいのか分らないで、ただ恥ずかしく笑う外ありませんでした。

ジムも気持ちよさそうに、笑顔をしていました。先生はにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真っ赤にして「ええ」と白状するより仕方がありませんでした。

「そんならまたあげましょうね。」

そういって、先生は真っ白なリンネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真っ白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の缺で真ん中からぶつりと二つに切って、ジムと僕とに下さいました。真っ白い手の平に紫色の葡萄の粒が重なって乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇えないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

小さき者へ

有島武郎

お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上った時、
——その時までお前たちのパパは生きているかいらないか、それは分らないことだが——父の書き残したものを繰り広げて見る機会があるだろうと思う。その時この小さな書き物もお前たちの眼の前に現れ出るだろう。時はどんどん移っていく。お前たちの父なる私はその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ないことだ。恐らく私が今ここで、過ぎ去ろうとする時代を噛み憐れんでいるように、お前たちも私の古臭い心持を噛み憐れむのかも知れない。私はお前たちのためにそうあらんことを祈っている。お前たちは遠慮なく私を踏み台にして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違っているのだ。しかしながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にいるか、あるいはいたかという事実は、永久にお前たちに必要なものだと思ふのだ。お前たちがこの書き物を読んで、私の思想の未熟で頑固なのを噛む間にも、私たちの愛はお前たちを暖め、慰め、励まし、人生の可能性をお前たちの心に味覚させずにおかないと私は思っている。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

れもん
檸檬

梶井基次郎

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終^{おき}圧えつけていた。焦燥^{しょうそう}と言おうか、嫌悪^{けんあく}と言おうか——酒を飲んだあとに宿醉^{ふっかよい}があるように、酒を毎日飲んでいると宿醉^{ふっかよい}に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖^{はいせん}カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにおざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまいたくなる。何か私を居堪^{いたたま}らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故^{なぜ}だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかつた街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親したしみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋が覗^{のぞ}いていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕^{むしば}んでやがて土に帰つてしまふ、と言つたよな趣のある街で、土塀^{どべい}が崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵^{ひまわり}があつたりカンナが咲いていたりする。

オツベルと象

宮沢賢治

……ある牛飼いが物語る。

第一日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。稲いねこき機械の六台も据すえつけて、のんのんのんのんと、おそろしない音をたててやっている。

十六人の百姓ひゃくしょうどもが、顔をまるつきり真っ赤にして足で踏ふんで機械を回し、小山のように積まれた稲いねをかたっぱしからこいていく。わらはどんだん後ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、もみやわらから立った細かなちりで、変にぼうつと黄色になり、まるで砂漠さぼくの煙けむりのようだ。

その薄暗うすぐらい仕事場を、オツベルは、大きな琥珀こはくのパイプをくわえ、吹ふき殻がらをわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈がんじょうで、学校ぐらいもあるのだが、なにせ新式しんしき稲いねこき機械が、六台もそろって回ってるから、のんのんのんふるうのだ。中に入るとそのために、すっかり腹がすくほどだ。そして実際オツベルは、そいつで上手に腹を減らし、昼飯時には、六寸ぐらいのビフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやってきた。白い象だぜ、ペンキを塗ぬったのでないぜ。どういうわけで来たかって？ そいつは象のとだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

山月記

中島敦

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作に耽った。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴はようやく焦躁に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、かつて進士に登第した頃の豊頬の美少年の佛は、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の僑才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々として楽しまず、狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。

李陵

中島敦

漢の武帝の天漢二年秋九月、騎都尉・李陵は歩卒五千を率い、

辺塞遮虜鄣を發して北へ向つた。阿爾泰山脈の東南端が戈壁沙漠

に没せんとする辺の磽确たる丘陵地帯を縫つて北行すること三

十日。朔風は戎衣を吹いて寒く、如何にも万里孤軍来るの感が深

い。漠北・浚稽山の麓に至つて軍は漸く止營した。既に敵匈奴

の勢力圏に深く進み入っているのである。秋とはいつても北地の

こととて、昔蓂も枯れ、榆や檉柳の葉も最早落ちつくしている。

木の葉どころか、木そのものさえ（宿營地の近傍を除いては）、容

易に見つからない程の・唯沙と岩と磧と、水の無い河床との荒涼

たる風景であつた。極目人煙を見ず、稀に訪れるものとは曠野

に水を求める羚羊ぐらいのものである。突兀と秋空を劃る遠山の上

を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても、しかし、將卒一同誰一人と

して甘い懷郷の情などに唆られるものはない。それ程に、彼等の

位置は危険極まるものだったのである。

朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、

「あ」

と幽かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ」

お母さまは、なにごとくもなかったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。すべ ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張ではない。こちよう 婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っちがていらっしやる。

河口局から郵便物を受け取り、またバスにゆられて峠の茶屋に引き返す途中、私のすぐとなりには、濃い茶色の被布を着た青白い端正の顔の、六十歳くらい、私の母とよく似た老婆がしやんと坐っていて、女車掌が、思い出したように、みなさん、きょうは富士がよく見えますね、と説明ともつかず、また自分ひとりの咏嘆ともつかぬ言葉を、突然言い出して、リュックサックしよった若いサラリイマンや、大きい日本髪ゆって、口もとを大事にハンケチでおおいかくし、絹物まとった芸者風の女など、からだをねじ曲げ、一せいに車窓から首を出して、いまさらのごとく、その変哲もない三角の山を眺めては、やあ、とか、まあ、とか間抜けた嘆声を発して、車内はひとしきり、ざわめいた。けれども、私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶でもあるのか、他の遊覧客とちがって、富士には一瞥も与えず、かえって富士と反対側の、山路に沿った断崖をじっと見つめて、私にはその様が、からだがしびれるほど快く感ぜられ、私もまた、富士なんか、あんな俗な山、見たくもないという、高尚な虚無の心を、その老婆に見せてやりたく思っ、あなたのお苦しみ、わびしき、みなよくわかる、と頼まれもせぬのに、共鳴の素振りを見せてあげたく、老婆に甘えかかるように、そつとすり寄って、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやり崖の方を、眺めてやった。

老婆も何かしら、私に安心していたところがあつたのだろう。ぼんやりひとこと、

「おや、月見草。」

そう言つて、細い指でもって、路傍の一箇所をゆびさした。さつと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花卉もあざやかに消えず残つた。

三七七八米の富士の山と、立派に相對峙し、みじんもゆるがず、なんと言うのか、金剛力草とでも言いたいくらい、けなげにすつくと立っていたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合う。

土佐日記

紀貫之

かどで
門出

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

その年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の刻に、
門出す。その由、いささかにものに書きつく。

ある人、県の四年五年果てて、例のことどもみなし終へて、
解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。
かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよく比べつる人々なむ、
別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつつ、
ののしるうちに、夜更けぬ。

二十日二日に、和泉の国までと、平らかに願立つ。藤原のときさね、
船路なれど、馬のはなむけす。上中下、酔ひ飽きて、
いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれあへり。

枕草子

清少納言

五月の山里

さつき

五月ばかりなどに山里にありく、いとを

お

かし。草葉も水もいと青く見えわたりたる

うえ

に、上はつれなくて、草生ひ茂りたるを、

おいしげ

ながながと、たたざまに行けば、下はえな

した

らざりける水の深くはあらねど、人などの

あゆむに走りあがりたる、いとをかし。

枕草子

清少納言

香炉峰こうろほうの雪

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子みこうし
まゐりて、炭櫃すびつに火おこして、物語りなどし
て集まりさぶらふろに、

「少納言よ、香炉峰こうろほうの雪いかならむん。」
と仰せらるれば、御格子みこうしあげさせて、御簾みすを
高く上げたれば、笑わはせたまふう。

人々も、「さることとは知り、歌などにさへえ
たへど、思いひこそよらざりつれ。なほ、おこの
宮の人にはさうべきなめり」といふ。

源氏物語

わかむつらなき
若紫

紫式部

清きよげなる大人二人ばかり、さては童わらべぞ、出いで入いり

遊あそぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白きぬき衣、

山吹やまぶきなどのなえたる着て、走り来たる女子おんなご、あまた

見えつる子どもに似るびようべうもあらず、いみじく生おひ先

見えて、うつくしげなるかたちなり。髪かみは、扇おうぎを広

げたるやうよにゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりな

して立てり。

「何事ぞや。童はらべと腹立たまえち給へるか。」とて、尼君あまぎみ

の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、子な

めりと見給たまうふ。「雀すずめの子を、犬君いぬきが逃がしつる。伏籠ふせご

の内にこめたりつるものを。」とて、いとくちをおしと

思えへり。

ほうじょうき
方丈記

鴨長明

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあ
らず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、
久しくとどまりたる例なし。世中にある人と栖と、
またかくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、
高き、いやしき、人の住ひは、世々を経て盡きせぬも
のなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔しありし家
は稀なり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家亡
びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変わらず、
人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、
わづかにひとりふたりなり。朝に死に、夕に生るゝ
ならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

徒然草

兼好法師

神無月のころ

神無月のころ、栗栖野くるすのといふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、はるかなる苔こけの細道を踏ふみ分けて、心細く住みなしたるいほりあり。木の葉にうづもるるかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。関伽棚あかだなに菊きく・紅葉もみぢなど折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよ、とあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子かうじの木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかば、と覚えしか。

徒然草

兼好法師

猫また

「奥山おくやまに、猫ねこまたといふものありて、人を食うらふなる。」
と、人の言いひけるに、

「山ならねども、これらにも、猫ねこの経へ上がりて、猫ねこまたに成りて、人んとることはあなるものを。」

と言うふ者ありけるを、何阿弥陀仏あみだとかや、連歌しける法師ぎょうがんじの、行願寺ぎょうがんじのほとりにありけるが聞きて、「独り歩か
ん身は、心すべきことにこそ。」と思いひけるころしも、あ
る所にて夜ふくるまで連歌して、ただ独り帰りけるに、小
川がわの端はたにて、音に聞きし猫ねこまた、過あやまたず足下へふと寄り
きて、やがてかきつくままに、首のほどを食わはんとす。

(略)

喜多人 おやどうした、抜けられねえか。

弥次郎兵衛 これ、手を引っぱつてくりや。

喜多人 ははははは、こいつはをかしい。

(弥次郎兵衛が両手をぐつと引っぱる。)

弥次郎兵衛 あいたたたた。

喜多人 弱え男だ。ちつとしんぼうすればいい。

弥次郎兵衛 あとのほうから足を引いてくれる。

喜多人 承知、承知。(後ろへ回り、両の足をとらへる。)やあ、ゑんさあ、ゑんさあ。

弥次郎兵衛 あいた、あいた。ああ、待つてくれ、待つてくれ。腰骨が折れるやうだ。こりや、やつぱり前のはうから引き出してくれ。

(言ふゆゑ、喜多人、前へ回り、両手をとらへて引く。)

喜多人 やあ、ゑんさあ、ゑんさあ。それ、またこつちへよつぽど出てきた。

弥次郎兵衛 こりやたまらぬ、あいたたたた。喜多人、これではいかぬ。初手のやうに、またあとへ引き戻してくれ。

喜多人 ええ、そんなに前へ回つたり、後ろへ回つたり、引き出しては引き戻し、いつまでもはてしがねえ。こりや、いい算段がある。(そばに見てゐたりし、参詣の人を頼みて、)もし、どうぞ、こつちからおめえ、引っぱつてくださいませ。わしが回つて、足を引きずり出しますから。ばかあ言ふな。両方から引っぱつては出る瀬がねえ。

喜多人 出る瀬がなくても、両方から引っぱると、前に回つたり、後ろへ回つたりする世話がなくていいわな。

短歌

中村憲吉

山路の青葉かげろふ岩の井に花つばき朱色あけにさびて映れり
やまみち

庭隅にゆふさり来れば眼のごとくボンタンの實みほのか光れり

空とほき星のあかりに砂原は路かげくろく雪夜のごとし

ほの白く闇に起きふす砂のうへ海のきはみは星の空かも

夕ちかき枯野をあよむ足のへの眼にさむき石の肌かも

夕暮るる枯野の沈み真悲しく心をなれと石によるかも

い群れゆく人の衣のちらちらと色にほへる街の上の春

わが息のかそけき音をそのままにうつつ静まり睡りゆくかも

静夜思 せいやし

李白

牀前月光を看る しょうぜん み

疑ふらくは是れ地上の霜かと う こ しも

頭を挙げて山月を望み こうへ

頭を低れて故郷を思ふ こうへ た う

元二げんじの安西あんせいに使ひするを送る

王維

渭城朝雨浥輕塵

ゐじょう渭城けいちんの朝雨うるほ輕塵を浥し

客舎青青柳色新

かくしやせい客舎青青りうしよく柳色新たなり

勸君更尽一杯酒

きみ君に勸む更に尽くせ一杯の酒

西出陽関無故人

かたやうくわん西の方陽関いを出づれば故人無からん

不識庵機山を撃つの凶に題す

頼山陽

鞭声肅々夜過河

鞭声肅々夜河を過る

暁見千兵擁大牙

暁に見る千兵の大牙を擁するを

遺恨十年磨一劍

遺恨なり十年一劍を磨く

流星光底逸長蛇

流星光底長蛇を逸す

頼山陽が十四歳の時に作った詩

頼山陽

〈原文〉

〈現代語訳〉

十有三春水 十三年の歳月が過ぎてしまった

逝者已如水 過ぎ去った時は戻らない

天地無始終 無限の宇宙に比べて

人生有生死 人の命には限りがある

安得類古人 どうか、昔の偉人や賢者のように

千載列青史 永久に歴史に残る人物になりたい

とうやどくしよ
冬夜読書

菅茶山

雪擁山堂樹影深

ゆき さんどう よう
雪は山堂を擁して

じゆえいふか
樹影深し

檐鈴不動夜沈沈

えんれいうご
檐鈴動かず

よるちんちん
夜沈沈

閑収乱帙思疑義

しず らんちつ おさ
閑かに乱帙を収めて

ぎぎ おも
疑義を思えば

一穗青灯万古

いっすい せいとう
一穗の青灯

ばんこ こころ
万古の心

百人一首

1 秋の田の仮庵の庵の苦をあらみ わが衣手は露にぬれつつ

てんじてんのう
天智天皇

2 春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

じとうてんのう
持統天皇

3 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

かきのもとのひとまる
柿本人麻呂

4 田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

やまべのあかひと
山辺赤人

5 奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

さるまるだゆう
猿丸大夫

6 かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける

ちゆうなごんやかもち
中納言家持

7 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

あべのなかまろ
安倍仲磨

8 わが庵は都のたつみしかぞすむ 世をうち山と人はいふなり

きせんほうし
喜撰法師

9 花の色は移りにけりないたづらに わが身世にふるながめせし間に

おののこまち
小野小町

10 これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関

せみまる
蝉丸

11 わたの原八十島かけてこぎ出でぬと 人には告げよ海人の釣舟

さんぎたかわら
参議篁

12 天つ風雲のかよひ路吹き閉ぢよ をとめの姿しばしとどめむ

僧正遍昭

13 筑波嶺の峰より落つる男女川 恋ぞつもりて淵となりぬる

陽成院

14 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに 乱れそめにしわれならなくに

河原左大臣

15 君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ

光孝天皇

16 立ち別れいなばの山の峰に生ふる まつとし聞かば今帰り来む

中納言行平

17 ちはやぶる神代も聞かず竜田川 からくれなゐに水くくるとは

在原業平朝臣

18 住の江の岸に寄る波よるさへや 夢の通ひ路人目よくらむ

藤原敏行朝臣

19 難波潟短き芦のふしの間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや

伊勢

20 わびぬれば今はた同じ難波なる みをつくしても逢はむとぞ思ふ

元良親王

21 今来むと言ひしばかりに長月の 有明の月を待ち出でつるかな

素性法師

22 吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ

文屋康秀

23 月見れば千々にものこそ悲しけれ わが身ひとつの秋にはあらねど

大江千里

24 このたびは幣ぬさもとりあへず手向山たむげやま 紅葉もみぢの錦神にしきのまにまに

菅家かんけ

25 名おにし負おはば逢坂山あふさかやまのさねかづら 人に知られでくるよしもがな

さんじょうのうだいじん
三条右大臣

26 小倉山をぐらやま峰ねのみぢ葉心はあらば 今ひとたびのみゆき待たなむ

ていしんこう
貞信公

27 みかの原いつみがはわきて流るる泉川いづみがは いつ見きとてか恋こひしかるらむ

ちゆうなごんかねすけ
中納言兼輔

28 山里は冬ぞさびしさまさりける 人目も草もかれぬと思へば

みなものむねゆき あそん
源宗于朝臣

29 心あてに折らばや折らむ初霜はつしもの 置きまどはせる白菊しじゆげいの花

おおしこうちのみつね
凡河内躬恒

30 有明ありあけのつれなく見えし別れより 暁あかつきばかり憂うきものはなし

みぶのただみね
壬生忠岑

31 朝ぼらけ有明ありあけの月と見るまでに 吉野よしのの里に降れる白雪

さかのうえのこれのり
坂上是則

32 山川やまがはに風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉もみぢなりけり

はるみちのつらぎ
春道列樹

33 ひさかたの光のどけき春の日に 静心しづこころなく花の散るらむ

きのともりのり
紀友則

34 誰たれをかも知る人にせむ高砂たかさごの 松も昔の友ならなくに

ふじわらのおきかぜ
藤原興風

35 人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香かにほひける

きのつらゆき
紀貫之

36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいづこに月宿るらむ

きよはらのふかやぶ
清原深養父

37 白露に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける

ふんやのあさやす
文屋朝康

38 忘らるる身をば思はず誓ひてし 人の命の惜しくもあるかな

うこん
右近

39 浅茅生の小野の篠原忍ぶれど あまりてなどか人の恋しき

さんぎひとし
参議等

40 忍ぶれど色に出でにけりわが恋は ものや思ふと人の問ふまで

たいらのかねもり
平兼盛

41 恋すてふわが名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか

みぶのただみ
壬生忠見

42 契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山浪こさじとは

きよはらのもとすけ
清原元輔

43 逢ひ見てののちの心にくらぶれば 昔はものを思はざりけり

ごんちゆうなごんあつただ
権中納言敦忠

44 逢ふことの絶えてしなくはなかなか 人をも身をも恨みざらまし

ちゆうなごんあさただ
中納言朝忠

45 あはれとも言ふべき人は思ほえて 身のいたづらになりぬべきかな

けんとくこう
謙徳公

46 由良の門を渡る舟人かぢを絶え 行方も知らぬ恋の道かな

そねのよしただ
曾禰好忠

47 八重葎しげれる宿のさびしきに 人こそ見えね秋は来にけり

えぎようほうし
恵慶法師

48 風をいたみ岩うつ波のおのれのみ くだけてものを思ふころかな

みなもとのしげゆき
源重之

49 みかきもり衛士のたく火の夜は燃え 昼は消えつつものをこそ思へ

おおなかとみのよしのぶ
大中臣能宣

50 君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな

ふじわらのよしとか
藤原義孝

51 かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを

ふじわらのさねかた あそん
藤原実方朝臣

52 明けぬれば暮るるものとは知りながら なほ恨めしき朝ぼらけかな

ふじわらのみちのぶ あそん
藤原道信朝臣

53 嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は いかにかに久しきものとかは知る

うだいしょうみちつなのはは
右大将道綱母

54 忘れじの行く末まではかたければ 今日を限りの命ともがな

ぎどうさんしのはは
儀同三司母

55 滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ

だいなごんきんとう
大納言公任

56 あらざらむこの世のほかの思ひ出に いまひとたびの逢ふこともがな

いずみしきぶ
和泉式部

57 めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな

むらさきしきぶ
紫式部

58 有馬山猪名の笹原風吹けば いでそよ人を忘れやはする

だいにのさんみ
大弐三位

59 やすらはで寝なましものを小夜ふけて かたぶくまでの月を見しかな

あかぞめえもん
赤染衛門

60 大江山おほえやまいく野の道の遠ければ 　　まだふみもみず天の橋立あまはしたて

小式部内侍こしきぶのないし

61 いにしへの奈良の都の八重桜やへざくら 　　けふ九重このへにほひぬるかな

伊勢大輔いせのたいふ

62 夜よをこめて鳥の空音そらねははかるとも 　　よに逢坂あふさかの関せきはゆるさじ

清少納言せいしょうなごん

63 今はただ思ひ絶たえなむとばかりを 　　人づてならでいふよしもがな

左京大夫道雅さきようのだいふみちまさ

64 朝ぼらけ宇治うぢの川霧かはぎりたえだえに 　　あらはれわたる瀬々の網代木あじろぎ

権中納言定頼ごんちゆうなごんさだより

65 恨うらみわびほさぬ袖そでだにあるものを 　　恋こひに朽くちなむ名こそ惜をしけれ

相模さがみ

66 もろともにあはれと思へ山桜 　　花よりほかに知る人もなし

前大僧正行尊さきのだいそうじようぎようそん

67 春の夜の夢ばかりなる手枕たまくらに 　　かひなく立たむ名こそ惜をしけれ

周防内侍すおうのないし

68 心にもあらでうき世にながらへば 　　恋こひしかるべき夜半よはの月つきかな

二三条院さんじよういん

69 嵐吹く三室あらしふ みむろの山のもみぢ葉は 　　竜田たつたの川の錦にしきなりけり

能因法師のういんほうし

70 さびしさに宿を立ち出いでてながむれば 　　いづ(す)こも同じ秋の夕暮ゆふぐれ

良暹法師りようぜんほうし

71 夕されば門田かどたの稲葉いなばおとづれて 　　芦あしのまろやに秋風あきかぜぞ吹く

大納言経信だいなごんつねのぶ

72 音に聞く高師の浜のあだ浪は かけじや袖のぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

73 高砂の尾の上の桜咲きにけり 外山の霞立たずもあらなむ

権中納言匡房

74 憂かりける人を初瀬の山おろしよ はげしかれとは祈らぬものを

源俊頼朝臣

75 契りおきしさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり

藤原基俊

76 わたの原こぎ出でて見ればひさかたの 雲居にまがふ沖つ白波

法性寺入道前関白太政大臣

77 瀬をはやみ岩にせかるる滝川の われても末に逢はむとぞ思ふ

崇徳院

78 淡路島かよふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝覚めぬ須磨の関守

源兼昌

79 秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ

左京大夫顕輔

80 長からむ心も知らず黒髪の 乱れて今朝はものをこそ思へ

待賢門院堀河

81 ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる

後徳大寺左大臣

82 思ひわびさても命はあるものを 憂きにたへぬは涙なりけり

道因法師

83 世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

84 長らへばまたこのごろやしのばれむ 憂しと見し世ぞ今は恋しき

ふじわらのきよすけあそん
藤原清輔朝臣

85 夜もすがらもの思ふころは明けやらで 閨のひまさへつれなかりけり

しゆんえほうし
俊恵法師

86 嘆けとて月やはものを思はする かこち顔なるわが涙かな

さいぎようほうし
西行法師

87 村雨の露もまだひぬ真木の葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮

じやくれんほうし
寂蓮法師

88 難波江の芦のかりねのひとよゆるみをつくしてや恋ひわたるべき

こうかもんいんのべつどう
皇嘉門院別当

89 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることの弱りもぞする

しよくしなしいんのう
式子内親王

90 見せばやな雄島のあまの袖だにも 濡れにぞ濡れし色はかはらず

いんぶもんいんのたいふ
殷富門院大輔

91 きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣片敷きひとりかも寝む

きよつとくせつしやうなきのだいじようだいじん
京極摂政前太政大臣

92 わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし

にじよういんのさぬき
二条院讃岐

93 世の中は常にもがもな渚こぐ あまの小舟の綱手かなしも

かまくらのうだいじん
鎌倉右大臣

94 み吉野の山の秋風小夜ふけて ふるさと寒く衣うつなり

さんぎまさつね
参議雅経

95 おほけなくうき世の民におほふかな わがたつ袖に墨染の袖

さきのだいそうじようじえん
前大僧正慈円

96 花さそふ嵐あらしの庭の雪ならで ぶりゆくものはわが身なりけり
入道前太政大臣にゆうどうなきのだいじょうだいじん

97 来ぬ人をまつほの浦うらの夕なぎに 焼くや藻塩もしほの身もこがれつつ

権中納言定家ごんちゆうなごんさだいえ

98 風そよぐならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける

従二位家隆じゆにいゐえたか

99 人もをし人も恨うらめしあぢきなく 世を思ふゆるにも思ふ身は

後鳥羽院ごとばいん

100 ももしきや古き軒端のきばのしのぶにも なほあまりある昔なりけり

順徳院じゆんとくいん